

● 男 和 卷 酒

號 一 第 一 號 捕 虜



版 社 潮 新

捕虜第一號

酒卷和男

目次

第一部 眞珠灣……………五

第二部 捕虜の運命……………五五

第三部 捕虜の實態……………二七

第四部 歸國……………一四九

表紙
カ
ツ
ト

古
澤
岩
美

捕虜第一號

第一部 眞珠灣

蒸し暑い特潜の中から母艦の甲板へ降り立つた。

冷々とした夜氣を含んだ南海の潮風が容赦なく私の顔を打ちつけて来る。

憑かれたやうに私はハワイの島影を求めた。薄暗い星明りの下に、ぼんやりと霞むオアフ島が見失はれさうに現れて来る。見失ふまいと凝つと見つめてゐると、その霞の奥から微かに、晝間聞いたホノルル放送局の耳慣れないジャズ音樂が響いて来るやうだ。言ひ知れない不氣味さが、敵地に乗入つた私を不思議な緊張感の中に追ひ込め、暫くはたゞ茫然と仁王立ちしてゐた。

昭和十六年十二月、開戦前日の曉近い頃である。

それから、私は潜航準備を急いだ。

「おーい。艇附、まだ直らんのか。」

「はい、艇長。皆目駄目ですよ。」

「うむ、さうか。……然し、もう潜入だ。諦めて、早く出て来い。」

速力を増したのか、艦尾の渦流がほの白い線條となつて消えていつた。

母艦の部屋に戻り、私は整備日誌に恐ろしい最後の記録を綴つた。それはいくら整備しても、轉輪羅針儀（ジャイロ・コンパス）が動かない事である。深い溜息が私の胸を壓迫し、そして大きく吐き出されると、重々しい胸苦しさが取残された。殆ど水上航走を許されない特殊潜航艇には、ジャイロ・コンパスこそ命の索であり、コンパス無しの出撃といふことは、常識では考へられないし、出撃をしたところでそれは直ちに不成功と死を意味するからである。今日迄の努力と挺身は、艇の完全整備であつた。然るに、今となつて故障を起すとは、果して整備努力の不足なのか、決定的な運命のからくりのいたづらなのか、私はその判断に迷つた。

青ざめた顔に涙の跡を見せながら、「艇長、済みません……」と、特潜と共に隨いて來たジャイロの整備員、吉本兵曹は佯しく、悲しさうに俯向いて言つた。然しその時、「なあにどうにかなるさ、心配ないよ。」と私は答へたのである。すぐすと歸る彼を見送つて整備日誌を書き終ると、何か取返しのない大きな過ちを犯した様な氣持が湧いて來た。そして、私はたゞぼんやりと机に向つた儘考へ込んでしまつた。

母艦イ號第二十四潜水艦は刻々と眞珠灣に接近して行くのか、ゆるやかな推進音が絶えず艦内に響き渡つてゐた。

パノラマの様に私の過去が現れては消え、消えては又現れて来る。

綺麗な山や川や農園に包まれた徳島、平和な牧歌的な片田舎、それが私の故郷である。田舎醫者に幾回も匙を投げられながら、私を育て上げてくれたのは両親であり、祖母である。身體を作る、これが私の小さい時の第一目標であつた。身長こそ低いが一人前の身體になると、私は未來の職業をあれこれと考へた。別に子供の時から軍人を志望してゐた譯ではない。中學校に入る時は高師を志望し、中學校の先生にならうと考へてゐた。然し周圍の變化といふか、私を取巻く時代の風俗や教育圖書等が、私の家族や友人達の言葉と共に、次第に私の思想や生活を新しい方向に導いて行つた様に思はれる。

中學生の時滿洲事變が起り、そして日華事變が続いた。軍國的氣分は私達の片田舎に迄も浸潤して來て、軍歌を唄ひ日の丸を振る出征兵士見送りの行事が続いた。そして、所謂非常時の時代心理が私の心の中を變へて行つた。健康體であれば、假令どんな職業に就いても、戦場に出て行

かなければならなくなるだらう、と考へるのが常識的であつた。鈍才の私には高師が難し^{ちが}さうに思へたし、大學コースへ進みたいとも思つたが、大學迄の經濟は疑はしいやうに思はれた。當時、日米開戦、第二の世界大戦勃發に就いて喧傳されてゐたので、同じ様に戦場に行き同じ様に死ななければならぬとすれば、寧ろ虎穴に入つてその道を磨くのが却つて男らしいと思つた。そして、萬一戦争が起らなくとも、努力次第では軍人であつても人間的成長が出来るかも知れないし、地道な中學校教師よりは、白か黒か、飛び込んで來たと勝負男を試す方が却つて面白く、それが時代の青年であるやうに思へたのである。さう思ふと、私は軍の學校へ行く事に決めてしまつた。結局、世界的な見識を得ないうちに、環境は熱情に燃える私を、日本がこの戦争に正しく勝つ事こそ世界平和への第一歩であると認識させたやうに思はれる。私は、陸軍より海軍を好んだ。何か固苦しい封建的な感じより、明朗でスマートに見える海軍が氣に入つたからである。「一錢五厘が兵隊ならば、士官は封書の三錢だ。」と叔父にひやかされながらも、私は海軍兵學校を選んできました。

軍隊に行つてからといふものは、結局戦ひに勝つことが主體であつたやうである。勝つための兵器操縦法や、身體と心の働かせ方や、そして死を厭はない事等が教へられた。特潜訓練も、結

局は明日の戦鬪に賭けられた苦勞の集積に過ぎないと思はれる。そして私は今、明日出て行かうとして妄想に耽つてゐるのである。

明日の戦ひ、明日の吉報、それを私を知る人々はどんなにか待ち焦れてゐるだらう。さう思ひながら腕を拱くと、同僚の顔が次から次へと眼前に浮んだ。その顔は次第に動き出し、笑ひ始め、そして訓練へと移つて行つた。棒倒し、相撲、橈漕……肉塊と肉塊が血塊を呼ぶ訓練——艦砲戦技、水戦夜襲、荒天航行……人間の精神力と肉體力が機械力と自然力に挑む死の訓練——それ等が走馬燈の様に眼前を走り去つた。取残された無數の訓練に對する記憶の塊、それは即ち明日のために集積されたものに過ぎなかつたのだ。さう思ふと、放心した様にぼんやりと机に向ふ私が苛立たしい存在となつて、私はいきなり自分の股を殴り、固い強い拳で無心に机を叩いた。ジャイロが何だ、俺は魚雷を持つてゐる。魚雷を命中させれば良いではないか。俺は吉報を作るんだ。さう獨り決めて、私は憤然と立つて狭い艦内を徘徊した。

それから、そつと二人の仲間が眠つてゐる隣の部屋を覗いた。艇附の顔がうなされてゐるやうに見える。好きな女があるのだらうか、明日の死を恐れてゐるのだらうか、と私は慮つた。そんな筈はない、彼は眞面目な軍人であり、獨身者である、と私はその思慮を否定した。

廣尾の顔が浮んで來た。

出發の前夜、廣尾と私は二人きりで呉の街を歩いた。「僕等は純潔を守らう。」廣尾は斯う言つてレスの前を横切つた。「人生二十餘年、到頭好きになる女がゐなかつたなあ。」「今更女々しくなりたくないさ。男の本望だ、潔く死んで行かうぢやないか。」「二人は斯う言ひ合つて、閉店の戸を叩き、香水を買ひ、更けゆく夜の呉に、そして明日を待つ日本に別れを告げたのである。

小笠原の島影に日本への名残を惜しみ、艦はハワイへ直航した。

ウエーク島が近づくにつれて、晝間はずつと水面下二十五米を、夜は浮上して走つた。暗夜の大洋中を航走してゐる間にも、涙ぐましい私達の整備は續けられてゐた。幸にも、艦から身體に結び着けて置いた命索いのちづなを手繰つて艦へ這ひ上つたが、私は白い飛沫の散る太平洋の怒濤に流された事もある。徹夜の整備をして、艇附は兵器を心配し續けた事もある。「死ぬのだ。」と決つてはゐても、「まさか死ぬことはないだらう。」とばかり思ひながら、今日迄張切つて來たのである。然し、ジャイロが駄目になつた。死ぬかも知れない。彼を死なすかも知れない。さう思ふと私の氣持は暗くなつて來た。彼、稻垣兵曹は鎮守府中で特選された最優秀者である。彼の生命は明日の戦ひに、いや私の方寸に委ねられてゐる。私は彼を死なせたくない。然し、私は彼を死なせね

ばならない。深い愁慮が私の考へをかき亂してしまふ。

私達が出會つたのは、昭和十六年四月であつた。それは海軍幹部で特潜の研究が進められてから數年、岩佐大尉や秋枝中尉等が搭乗員として第一回の講習訓練を始めてから半年後である。私達士官十二名、下士官二十四名が第二回の特潜搭乗員としての訓練を始めたのは、第一回講習で實用的成果の確信を得たからであつた。

私達は日本海軍中から概ね次の様な事を考慮し、特別嚴重に選拔されたい。

一、身體强健で意志鞏固な者。

二、元氣旺盛で攻撃精神の強い者。

三、獨身者。

四、家庭的に後顧の少い者。

選拔は自己希望ではなく、海軍大臣からの任命であつた。然し、私はこの任命を光榮と思つてゐた。

私の知つてゐた軍人といふものは、結局は戦ひに行き、全力で戦ひ、戦ひに勝つものことであつた。戦ひに行けば、戦ひに勝つ迄に死ぬかも知れない。然し、いづれにせよ軍人といふもの

は、潔く死ぬるものでなくてはならない。軍人も人間であつてみれば、死にたくないといふ人間の本心に變りはないのであるが、一般の人間社會を娑婆と呼ぶ日本の軍隊が、國家のために戦ふ軍人といふものの考へ方を人間の考へ方から飛躍させ神性化してゐるのだから、それがたとひ良からうと悪からうと、軍人になつた限りは、男らしく潔く死ぬなくては噓である。海軍兵學校の時、軍人は何時でも死ぬる事や、戦ひには絶對勝たなくてはならない事が一番大切であると繰り返し訓はつた。之に對し、私は肯定出来ない疑問も抱いてはゐた。私は何時でも死ぬる事より、何時でも軍人として生き得ることがより重要であるとも考へてゐた。死は如何なるところからもやつて来る。最後の勝利のためには、より多くの者が生残つて戦はねばならない。何時でも死ぬるといふ事の強調は、どうも無頓着な死——手段を選ばない死——といふ様な、死を輕視する傾向に陥る氣がした。死といふものを、もつと深い、もつと慎重な、意義のある死にしたいと思つてゐたのである。

日本軍隊の考へは、軍人を神性化してゐたやうであるが、私は軍人でありながら、この考へを肯定出来なかつた。

兵學校を出てから、忙しい練習艦隊の實務訓練や飛行訓練が続いた。第一水雷戦隊の旗艦「阿

武隈」では、主として砲術士と甲板士官の勤務に就いた。水上機母艦から特殊潜航艇母艦へ改装してゐた「千代田」乗組となつてから、私達の第二回特潜講習が始まつたのである。

その時、私はその一員に加はる事を軍人の光榮と思つたのであつた。それは、華々しく捨てられて行く一つの石ころを自認してゐたからに外ならない。

特潜は呉海軍工廠の魚雷實驗部で作られてゐた。私達は「千代田」に起居し、工廠の特別室で特潜の基礎勉強を行つた。呉の海軍潜水學校で行ふ模型に依る襲撃訓練や、瀬戸内海の一漁村三机を基地とした實地訓練の時も、私は艇附と一緒にだつた。特潜が岩礁と衝突したり、目標艦にぶつかつたりしながらも、私達の腕は百發百中に近いところまで漕ぎつけてゐた。困難な整備と戦ひながら八箇月、共に働き共に助けてくれたのは、今安らかに眠つてゐる艇附である。

彼も亦人間である。私は彼を死なして良いのだらうか。彼は死んで行く運命にあるのだらうか。私の心は動もすれば動かうとした。然し、彼は軍人である。軍人には軍人の使命がある。私達の力でどうすることも出来ない大きい掟と軍人の運命が横たはつてゐる。華々しく死んで行く軍人の死と、人生を味はつて死んで行く人間の死と、死に二つはない。早いか遅いか、いづれにしても五十歩百歩である。同じ死ぬのであれば、華々しく死ぬ方が賢いかも知れない。さう思ふ

と、もう人間の生活に未練がない。軍人として潔く死んで行かう、潔く死なせてやらう、と私は決意を固めた。

私は死んで行くために整備日誌へ私の遺書をしたため始めた。ペンは静かに、そしてすらすらと動いた。書き終つた私には、もう思ひ残す事はなかつた。

眞珠灣が近いのか、推進音が小さくなつて來たやうである。

私は急いでベッドへもぐり込んだ。

二

午後八時頃。

眼の醒めた私は司令塔へ急いだ。

早鐘の打ちさうな胸の中へ、ぐつと唾を呑み込んで、しつかりと把手を握つた。

眞珠灣口が大きく潜望鏡に現れる。紅や緑の燈が不思議に鮮かに見える。微かに空をぼかしてゐる街の燈、靜かに眠つてゐる黒いオアフ島の山、すべては平和な、靜かな、ハワイの夜景であ